

令和3年度 第3回 泉鳥取高等学校 学校運営協議会 議事録

学校運営協議会次第

日時 令和4年1月21日（金） 14：00～17：00

場所 泉鳥取高等学校 A 棟 1 階 会議室（Zoom開催）

○会議室

1. 校長挨拶（5分）
2. 本校各部（委員会）よりの報告（約20分）
 - ① 各部署から報告
 - ② 学校教育自己診断の結果について（首席）
 - ③ 授業アンケートの結果について（教頭）
 - ④ 近況報告（教頭）
- <休憩>
3. 協議事項(司会：運営協議会会長)
 - ① 令和3年度学校運営計画評価について
 - ② 令和4年度学校運営計画（骨子）について
 - ③ 次年度への提言等（各部署報告を省みて）
4. 校長挨拶
5. 諸連絡 ※令和4年度 学校運営協議会 第1回：令和4年6月の予定

○出席者

1. 学校運営協議会委員——5名
2. 学校運営協議会事務局員(教職員)——10名

○報告事項

① 本校各部（委員会）よりの報告

1. 各部（委員会）よりの報告は特になし

② 学校教育自己診断について（安田首席）

1. 12月に学校教育自己診断を実施し、今年はネットで選択して答える形式に変えた。
2. 学校経営計画の『確かな学力』については、一昨年が49%、昨年は48%、今年が54.8%と昨年より6%上がった。
3. 『安全安心な学校・生徒に寄り添う生活指導』については、一昨年、昨年は59%であったものが、今年は66.8%となった。
4. 『将来の生き方デザイン・キャリア教育』については、一昨年、昨年は6割程度であったが、今年は80.4%の肯定的回答を得られた。
5. 教員の資質向上について、『他の先生が授業見学に来ることがあるか、研究授業を行っているか』については生徒の回答は57.6%と昨年よりは少し上がったが、一昨年よりは大きく減少している。
6. 今年度は人権意識の向上を図る研修、日ごろの取り組みとして人権尊重の観点を強調しつつ指導を行った結果、人権尊重に関しては概ね良好な結果が出ている。

③ 授業アンケートの結果について（妻木教頭）

1. 7月7日に行われた授業アンケートと12月15日に行われた授業アンケートを比較すると、全項目において数値が減少しているが、学習内容が難しくなっているので想定内の範囲である。また、今年度の授業アンケートの学校平均は3.15となっている。令和2年度は3.05と今年度は0.1ポイント上昇している。教職員が生徒の話をこまめに聞くことを校内で徹底していることもあり、教職員と生徒の信頼関係が向上しているということがこのアンケートから読み取れる。

④ 近況報告（池田教頭）

1. 新型コロナウイルス感染用拡大により1年生が1月19日～1月21日まで学年閉鎖、2年生が1月29日より修学旅行を予定していたが3月中旬に場所を変更して行けないか延期している。
2. 生徒の在籍に関して、4月当初508名であったが現在497名の在籍人数となっている。転退学者11名は去年と比較して大幅に減少しており、学校に来るのが楽しいと言っている結果だと思われる。
3. 懲戒の件数も昨年54件あったものが、今年度は13件とこちらも大幅に減少している。
4. 今後の予定として、1月25日から3年生は学年末テストが開始され、2月25日に卒業式が行われる。

3. 協議事項【司会：運営協議会会長(観光大学副学長山田様)】

- ① 令和3年度学校運営計画及び学校評価について
- ② 令和4年度学校運営計画（骨子）について
- ③ 次年度への提言等（各部署報告を省みて）

①令和3年度学校運営計画及び学校評価について（学校長）

1. 『内容がわかりやすい授業が多い』の項目では、令和2年度は60.7%であったが、令和3年度は62.1%と1.4%上昇している。
2. 『学習の評価は、テストの点だけでなく、生徒の努力や授業に取り組む姿勢等を含めて行われている』については、令和2年度は72.6%であったが、令和3年度は76.0%と3.4%上昇している。
3. 『将来の進路や生き方について考える機会がある』については80.4%と令和5年度達成目標を大幅に超える数値となった。
4. 同様に、『先生は進路についての情報をよく知らせてくれる』という項目も令和3年度で82.5%であり、令和5年度の目標数値を超えている。
5. 『自分の学力の向上を実感している』、『他の先生が授業を見学に来ることがある』という項目でも昨年度より若干上昇している。

②③令和4年度学校運営計画（骨子）・次年度への提言等（各部署報告を省みて）のまとめ

（意見①）：阪南市福祉協議会 坂上様

1. 授業のわかりやすさ等、パーセンテージの伸びが大きい項目が多い。
2. 令和3年度は地域の方からの評価を高く受けている点に着目している。具体的には、泉鳥取高校の生活デザインの授業で作成したクリスマスカードを、地域のボランティアさんが、施設の方や引きこもり気味の高齢者の人たちに、今の高校生の思いを共有したいということで届けてくれた。受け取った方たちは、とても喜んでくれたという感想が上がってきている。そういったことも踏まえて、泉鳥取高校への関心や期待が高まってきているのではないかとと思われる。

（意見①に対して）：池田教頭

1. 本年度は、校内にある畑でサツマイモを植え、朝日幼稚園の4歳児、5歳児11名の子どもたちが本校の生徒たちと芋堀りを行った。
2. このときに穫れたサツマイモは幼稚園の子どもたちは持って帰ってもらい、本校では調理実習でスイートポテトを作るなど、昨年度はできなかった地域交流ができた。

（意見②）：PTA 会長 譜久村様

なかなか活動ができないなかで色々できて良かったと思う。

（意見③）：地域代表 大久保様

1. 普段の教員の活動が良く、子どもたちの学力が上がっているのはとても良い。
2. 保護者の学校教育自己診断もパーセンテージ的にとても良い評価になっており、日ごろの活動が実になっている。今後も引き続き頑張りたい。

（意見④）：阪南市立鳥取東中学校長 田窪様

1. 鳥取東中学校でも学校教育自己診断に取り組んでいるが、数字を上げていくのは大変である。私自身の感覚としては、まず先生方に同じ方向を向いてもらわないといけないと思っている。
2. 一番最初に使用したデータの見方が非常に煩雑でわかりにくかったと思う。折角伸びている項目がたくさんある中で、今年の肯定的評価・否定的評価の横にでも昨年、あるいは一昨年の数値をいれてくれば、どの項目が伸びているのかどれくらい伸びているのかが一目瞭然だと思う。
3. 学校経営計画及び学校評価の中では網掛けしているので、どこが伸びているのか、過去の数値はどうであったのかを示している。私は子どもたちの数値が最も大切であると思っている。中学生でも、保護者の数値というのは、子どもが家に帰って保護者と話をし、どんな話をするかで量っていると思われる。したがって、子どもの数値が一番大事で一番正直だと思っている。なので、この数値、この扱いというのをこれからも大切にしたいと思う。

（質問①）：観光大学副学長 山田様

色々な項目が伸びている中、集約されるのが楽しいと感じている生徒の比率が高まっているという点であるが、何故そうになっていったのか。コロナ禍において、そもそもコロナ禍が関係しているのか、全員タブレットを持っているということが関係しているのかも含めて、今年度、数値がアップしている原因として、具体的な肝となる部分は何かあったと考えているか。

（質問①に対して）：妻木教頭

コロナの影響もあったと思うが、保護者や生徒と非常にマメに話ができた、接触面積が広がった点が非常に大きいと思っている。そして、生徒の事情を聴いた上でその背景まで理解するように我々も先生方にお願いしていた。これができないからダメです、ではなく、何故できないのかということまで入り込んで、その中で学校ができる支援は何なのかということを先生たちが考えて下さったのではないかな。一番大事なものは、接触面積と話し込みの量だと思う。それが増えたことが一番大きな原因だと思っている。

（質問②）：観光大学副学長 山田様

言い換えれば、コミュニケーションが充実する形で行われてきた、ということになるのか。

（質問②に対して）：妻木教頭

先生たちがわかってくれるという生徒が増えたというのが大きいと思う。

（質問③）：観光大学副学長 山田様

普通オンラインを入れれば入れるほど、コミュニケーションをとるのが難しくなる。特に高校では対面の比率が高い。オンラインを併用しなければならない中で、対面も含めたコミュニケーションを全体として充実させることができたと考えているのか。

（質問③に対して）：妻木教頭

非常にプリミティブだが、電話であったり、直接会ったりということが距離感を縮めていったと、私たちが見ていてよくわかった。生徒指導の特別指導が大きく減っているのも、事件を起こす前に話ができていたのが大きいと思う。

（意見④と質問④）：観光大学副学長 山田様

1. オンラインと電話には長所短所があり、オンラインは全員の顔が見えて情報量が多いが、零点何秒かのタイムラグが生じる。対して、電話はリアルタイムで反応することができる。相手との反応を感じながらコミュニケーションをとることができるかどうかという点でいうと、オンラインというのは若干問題がある。そのため、電話を併用するという事は非常に良いことだと思った。
2. 先ほど、田窪校長先生より、教職員の戦略や対応という点で、同じ方向を向いてという話があったが、一人一人多様な人がいる組織の中で、同じ方向を向けられるかどうか、同じ目標を持っているかどうか、ということは大変大きなことだと思う。泉鳥取高校では、教職員の意識という点について、どうであるのか、そして変わってきているのか。

（質問④に対して）：学校長

三年後の廃校に向かって、生徒自身がどう捉えるのかがまず心配であった。そして、教員のモチベーションとしても、どんな形になるのかについても心配していた。生徒も最初は何故という気持ちが強かったかもしれないが、先生方の努力する姿やコミュニケーションをマメにとる中で、教員の思いをわかってくれたと思う。廃校ということが逆にモチベーションとなって、教員として一丸となって当たれているのではないかと思う。

（意見⑤と質問⑤）：観光大学副学長 山田様

1. 廃校ということは滅多にないことで、どう作用するかわからず、中々経験することはできない。そのことを逆にエネルギーに転化できれば、今までにない力を出せるのではないかと思った。
2. 田窪委員は、教職員を同じ方向に向かせるためにどのようなことをしているのか。

（質問⑤に対して）：阪南市立鳥取東中学校長 田窪様

学校教育自己診断の結果を教職員に示し、教員のモチベーションを高めていく。そして、個人的に教職員向けに通信を作っており、先生方の頑張りが学校を変えていくということを繰り返し伝えている。

（意見⑥）：観光大学副学長 山田様

大学でも何を強調して、どういう方向にもっていくかを皆で精神的に共有することが難しいが、教職員に説明し、意見を聴取することを繰り返し行うことで全体として組織的なベクトルを同じ向きにもっていくようにしている。中学校・高校・大学もそれぞれ別の課題をもっているが、ある意味で共通したところがあるように感じた。

諸連絡

次回：令和4年6月を予定